The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「千年調」考 : 陳師道を中心として
Author(s)	趙, 蕊蕊
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2015, 49, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61355
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「千年調」考

——陳師道を中心として——

趙　蕊蕊

キーワード：千年調／千年計／鉄門限／陳師道

「千年の調」は、長い由来を持つ言葉であり、北宋においては俚語として広く行われていた。梅堯臣（1002–1060）と陳師道（1053–1101）はそれを伝統的な詩の領域に導入した。「俗を以て雅と為し、故を以て新と為す」という考え方に基づくものであろう。本稿は北宋の詩歌における「千年の調」、特に陳師道の詩における用法に注目して検討を加える。それによって、唐宋文人の死生観を窺うとともに、士人たちがどのように儒家思想を以て仏教や道教の生命観を更新していったのかを明らかにしたいと思う。

一　「千年調」について

陳師道の「臥疾絶句」詩に「一生也作千年調、兩腳猶須萬里回（一生の間に「千年の調」をなしても、二本の脚

はなお万里の道を回ってゆかなければならない[1]」という句がある。ここでの「千年調」について、任淵の注は「人是黒頭蟲、剛作千年調。鑄鐵作門限、鬼見拍手笑（人は黒頭の虫に過ぎないのに、「千年の調」をなそうとする。鉄を鋳て門を作れば、鬼が見て手を拍って笑う）」という寒山の詩を引いている。この詩は宋の恵洪の『林間録』[2]にも見える。また、王梵志に「世無百年人、擬作千年調。打鐵作門限、鬼見拍手笑（世に百年の寿命を全うする人は無いが、「千年の調」をなそうとする。鉄を鋳て門を作れば、鬼が見て手を拍って笑う）」という詩があり、寒山の詩とよく似ている。王詩は『雲溪友議』『梁溪漫志』[3]などの文献に見える。そのほか、敦煌遺書ペリオ二九七六の「五更転」に「人皆恆作千年調、謂將不死鎮安居（人は皆な「千年の調」をなし、これによって不死にして安泰の人生が送れると思う）[4]」という句がある。

「千年調」とはどのように解すべきだろうか。「調」には「計算、計画」という意味がある。例えば、『資治通鑑』斉和帝中興元年に「敕太官辦樵米爲百日調而已（太官に薪や米を用意させ、百日の計画とした）[5]」という句があり、胡三省は「調」を「計画」と解釈している。前引の敦煌遺書「五更転」の「不死」という言葉は「千年調」を千年の計画と解する助けとなる。先に挙げた寒山詩と王梵志詩とでは、第一句の表現がやや異なっている。寒山詩「人是黒頭蟲」は人を虫に喩えているが、これは古くは『大戴礼記』[6]に見え、そこでは人のことを羽、毛及び鱗がないので、「倮虫」と呼んでいる。その後、後漢の王充や仲長統などもこれに言及している。[7]寒山の他の詩に「寒山有躶蟲、身白而頭黒[8]」という句があり、やはり人を黒い髪の虫と呼んでいる。しかし、言わんとするところは王梵志詩の第一句「世無百年人」とまったく同じであり、人は虫けらと異ならず、結局は死に至ると言うのである。要するに、「千年調」は人が千年の長生を計画することを意味する。

「千年調」と同義の言葉に「千年計」「千年画」があり、以下に挙げるように唐宋文人の詩に散見される。

貪生莫作千年計、到了都成一夢間。（命を貪って千年の計画をなしてはいけない、結局は一つの夢となって終わってしまう）（唐・吳融「武關」[9]）

百年便作萬年計、巖畔古碑空綠苔。（百年の限りある生命で万年の計をなしても、岩のそばの古い碑は緑の苔に空しく覆われている）（唐・許渾「凌歊臺」[10]）

人生不滿百、剛作千年畫。（人生は百年にも満たないにもかかわらず、千年の計をなす）。（南唐・李煜殘句[11]）

旁觀不作千年計、會有局成柯爛時。（旁観して千年の計をなさなければ、囲碁の勝負がつくときには斧の柄が朽ちてしまっているだろう）（宋・洪炎「又疊前韵二首」其一[12]）

卜居便作千年計、會見蟠桃著子時。（居住地を定めて千年の計をなせば、きっと仙桃が実をつけるのを見ることができよう）（宋・張嵲「二月二十四日至魏塘七首」其五[13]）

胭脂却作千年計、不似愁魂四散飛。（美女の身を飾った臙脂は千年の計をなし〔永遠に胭脂の名を残し〕、美女の愁える魂が四散したのには似ていない）（宋・范成大「胭脂井三首」其二[14]）

いずれも長生の計画を意味する語として「千年調」の語を用いたものである。これらの例には、仏教や道教の影響が色濃く窺えるのではないだろうか。

前述の王梵志、寒山の詩には「千年の調」のほか、「鉄の門限」という言葉も用いられている。これは死神を阻止する鉄の門であり、「千年の調」を確かなものにするためのものである。南宋の范成大「重九日行営寿蔵之地」に「縱有千年鐵門限、終須一箇土饅頭（たとえ千年も朽ちない鉄の門限があっても、結局は一基の墓に葬られる）[15]」とある。「鑄鐵作門限」は長生を実現するために想像のなかで編み出されたものであり、死に抗う象徴として詩歌の歴史

に連綿と息づいてきたのである。

王梵志、寒山の詩の最後の句に見える「鬼見拍手笑」は、作者の「鑄鐵作門限」に対する見方を表している。此の句は『南史』劉粹伝に基づく。

宗人有劉伯龍者、少而貧薄、及長、歴位尚書左丞、少府、武陵太守、貧窶尤甚。常在家慨然、召左右將營十一之方、忽見一鬼在傍撫掌大笑。伯龍歎曰「貧窮固有命、乃復為鬼所笑也」[16]。（宗家に劉伯龍という人がいた。若い時には貧しく、成長すると、尚書左丞、少府、武陵太府を歴任したが、ますます貧困を極めた。いつも家にいて慨嘆していたが、周りの者を集めて商売を始めたところ、たちまち鬼がそばで手をたたきながら笑うのが見えた。伯龍は嘆いて言った、「貧困は元より運命であるが、鬼に笑われることになるとは」。）

貧しい劉伯龍が商売を始めたところ鬼に笑われたという話である。貧困は運命として決まっており、金持ちになろうとする計画は徒労に終わるので、鬼が笑うのである。この典故を踏まえて、「拍手笑」は、人が長生を実現するために謀（はかりごと）を巡らし、鉄の門をこしらえるのを見た鬼が、それを無意味なことだとして嘲笑うことを言うのである。この鬼の笑いは、仏教の死生観が道教のそれを嘲笑っていると言ってもいいかもしれない。

なお、王梵志の詩には「有錢但著用、莫作千年調（お金があれば使うべき、千年の計をなしてはいけない）」、「漫作千年調、知身得幾時（みだりに千年の計をなすが、その身がいつ終わるのか分からない）」、「貯積千年調、擬覓妻兒樂（千年の計を暖めて、妻や子と楽しむのを求めようとする）」、「漫作千年調、活得沒多時（みだりに千年の計をなすが、生きていられるのは長いことではない）」、「不得萬萬年、營作千年調（万年の寿命を得るのは無理なのに、

千年の計をなす」[17]のように、「千年調」という言葉がしばしば用いられている。敦煌から発見された多くの写本によって、王梵志の詩が広く伝わっていたことが分かる。「千年調」の思想も、それに伴って広まっていたことが窺われる。胡適は王梵志の活動時期が約590-660年であること、寒山はその後に活動した詩僧であり、意図して王梵志の詩を模倣したことを論じた[18]。これに従えば、王梵志の詩において「千年調」という言葉は十分に熟しており、それが寒山へと受け継がれたと見なしていいだろう。

以上に見てきたのは伝統的な士人の詩における「千年の調」の思想であるが、これは通俗的な詞曲文学にも共通して見られる。例えば、北宋の詞人曹組（生卒年未詳）には「相思会」詞[19]があり、前引の寒山詩を隠括する形で作られており、原詩と同様の「千年調」の思想が述べられている。南宋に至ると、辛棄疾の詞をはじめとして「千年調」はすでに詞牌として用いられており、以後、元曲や明清の小説にも見られる。このような展開から見て、「千年調」は通俗的な俚語として多様な階層に広く受け入れられていったと見なしてよいだろう。もちろん、俚語として通俗化したからと言って、この言葉が伝統的な詩歌に見られなくなったわけではない。北宋の梅堯臣と陳師道はこの言葉を詩に用いている。以下、この問題について詳しく検討したい。

二　北宋の詩における「千年調」

「千年の調」は北宋の頃に「人作千年調、鬼見拍手笑」[20]という俚語となって流布していた。しかし、文人の詩にはさほど流行しなかったようだ。北宋では梅堯臣と陳師道の例があるのみである。

まず、梅堯臣が嘉祐四年（1059）に作った「衛尉邵少卿挽詞二首」を見てみよう。

位至九卿亞、年過七十春。桐鄉歸葬日、棠樹去思人。霧裏開蒿隧、原邉起石麟。地遥徒有涙、灑向北風頻。（邵少卿は九卿に匹（たぐい）するほどの位に至り、齢は七十を過ぎた。桐鄉に葬られる日には、人々が善政の失われたことを悼む。霧のなか雑草を抜いて墓が築かれ、野原に石の麒麟像が建てられる。わたしは遠くより、北風に向って頻りに涙を流すばかり。）

買得吳門宅、歸來自種花。春風未歌徹、東岱已魂賒。昔作千年調、今爲一日嗟。人將鐫美德、磨石取江沙。[21]（呉門の屋敷を買い、帰ってそこに花を植えた。春風のなか歌を歌い終わらぬうちに、魂はすでに遠く泰山へと飛び去っていった。昔、千年の計をなしたが、今それは一日の歎息と化してしまった。人々は彼の美徳を刻もうとして、江辺から石を取ってきて磨きあげる。）

第一首は邵少卿が在任時に善政をしき、人々が彼を深く悼んでいることを述べ、第二首は彼の晩年の暮らしぶり、その美徳が人々によって永遠に伝えられることを述べている。この詩の場合、王梵志、寒山の詩と同様に「千年調」を用いているが、それが表す意味合いは若干異なると思われる。梅堯臣の詩の「千年調」は、邵少卿が昔、その善政によって人々に恩沢を与えたこと、また晩年には住宅を買い、そこに花を植えたことなどを踏まえて用いられており、ただ単に長生への願いを託したものではないだろう。現実の具体的な人生に裏づけられたものである点で、上述したような長生を祈る象徴としての「千年調」とは異なっていると考えられる。

陳師道は、詩に俗語を多用したことで知られる。「千年調」についても二つの用例が見える。この語は果たして「故を以て新と為す」効果を生じているだろうか。冒頭に一部を挙げた陳師道「卧疾絶句」の全文を読んでみよう。

老裏何堪病再來、愁邊不復酒相開。一生也作千年調、兩腳猶須萬里回。（年老いて再び病に侵されるのは堪えがたく、憂いのなか二度と酒を飲む気にならない。一生の間に千年の計画をなしても、二本の脚はなお万里の道（人生の道）を回（かえ）ってゆかなければならない。）

この詩は元祐八年（1093）に穎州で作られた。第三句は詩人が一生の長期的なもくろみを抱いていることを述べる。末句の「万里回」は『開天伝信記』に収められる話――万回なる人物が千里を隔てていた兄を訪ね、日帰りした不思議な話を踏まえる。[22] 陳師道は万回のような遠大な旅を実現しようとするが、「猶須」とあるように、現時点ではその願望はいまだ実現していない。「千年調」は結局のところ、幻想に過ぎず、陳師道は老いと病の現実から逃れることはできないのだ。

また、棣州教授を勤めた時の作品「元符三年七月蒙恩復除棣学喜而成詩」を見てみよう。

老作諸侯客、貧為一飽謀。折腰真耐辱、捧檄敢輕投。早作千年調、中懐萬斛愁。暮年隨手盡、心事許溟鷗。[23]（老いて諸侯の賓客となり、貧しさのなか食の満ち足りた暮らしを求める。腰をかがめて屈辱に堪え、奉じた檄文を軽々しく棄てはしない。若きより千年の計を抱いていたが、人生の半ばには多くの愁いに囚われた。晩年になるに従っていつしか愁いは失せ、胸の内は鴎と契りを交わしている。）

最初の二句は老いてなお貧しく、食の満ち足りた暮らしを求めていることを述べる。続く二句は陶淵明が人に頭を下げるのをよしとしなかった故事、[24] また任用の詔を奉じ母のために喜んでみせた毛義が、母が亡くなると詔を棄てた

故事[25]を用い、自分は彼ら二人とは異なり、官職に甘んじていることを述べる。第五句「早作千年調」は棣州教授を勤める頃から既に抱いていた長期的なもくろみであろう。陳師道の「答張文潜書」には「僕家以仕爲業（わが一族は出仕を業とする[26]）」とある。したがって、ここでの「千年調」は官途を求める生活を指していると考えていいだろう。上述のような長生を祈る意味と比べると、陳詩の「千年調」は具体的な生活実践としての意味合いが強い。陳師道は限りある生命のうちに、自分の努力で計画し、よりよく生きていくことを強調しているのである。

右に見てきたように、梅堯臣や陳師道における「千年調」は、王梵志や寒山が述べるような長生願望ではなく、具体的な人生設計を強く意識して用いられている。現実の生活との密接な繋がりを持つ、より実践的な意義を帯びたものとなっていると言えよう。

三　陳師道の詩における「千年調」

以下、陳師道の詩における「千年調」の具体的な表現とそこから生じる現実的・実践的な意味について検討してみたい。陳師道は詩や文の中で、しばしば人生の計画に言及している。例えば、上述の「僕家以仕為業」など。これらは、陳師道の「千年調」に見られる特徴の一つと言えるだろう。その他にも、陳師道は様々な人生のもくろみを提示している。例えば、元祐五年（1090）の詩「次韻春懐」を見てみよう。

欲作歸田計、無如二頃何。折腰方賴祿、拭面未傷和。日下烏聲樂、塵生馬跡多。渡頭留小楫、乘興得相過。[27]（郷里へ帰る計をなそうとするが、二頃の畑がなくては如何ともしがたい。仕方なく腰をかがめて俸禄に頼り、役人

仲間との関係を損なったりしない。昼には鳥の声が楽しげに鳴き交わし、馬が多く行き交い塵が舞いあがる。渡し場には小舟が繋がれている、興に乗じて友を訪ねることもできる。）

後漢の張衡「帰田賦」は仕官から帰隠への感情の変化を述べた作品である。それと同じく、陳師道もまた隠居のもくろみを抱いている。これもまた「千年調」の具体的な一例と見なしてよいだろう。しかし、詩人は隠居をなしえず、現実には腰を屈め俸禄を頼る仕途の道を選択せざるを得ない。

出仕と帰隠、この二つの葛藤は、陳師道の詩に頻繁に表れる。同じ年の作品「徐氏閒軒」を読んでみよう。

倦遊梁楚愛吾廬、老寄山林孰與娛。想見杖藜臨過鳥、更能赤手縛於兔。君寧平生輕三釜、我亦東原有一區。擬買嬋娟作歸計、可無堆玉斗量珠。[28]（梁や楚の旅に厭き故郷の廬にあこがれるが、老いて山林に帰ったとしても誰とともに楽しむというのか。いま君が杖を手に天を飛ぶ鳥のそばに立ち、素手で虎を捉える様子が思い浮かべられる。君はこれまで三釜〔少ない俸禄〕を軽んじてきた、わたしもまた東の原野に畑がある。美女を買って帰ろうとすれば、山ほどの玉石や珍珠がなくてはならない。）

最初の二句は仕途の生活に厭き、山林に帰るつもりだと述べる。任淵は「赤手縛於兔」について「言処閑之難（閑適の生活の苦しさを言う）」と解釈している。末尾の二句も隠居の難しさを述べる。出仕と帰隠との二つのもくろみの間で揺れ動く陳師道の複雑な思いは本詩からも読み取れる。陳師道の「千年調」は、出仕と帰隠との間で揺れ動く思いを含んでいたと見なしてよいだろう。

この他にも、陳師道の多くの詩には、出仕と帰隠との間で揺れ動く「千年調」が表現されている。例えば、「湖上」に「白頭厭奔走、何地與為鄰（白髪頭であちこちを歩き尽くし、いったいどこで君と鄰になれるのか）[29]」、「舟中二首（其一）」に「少年行路今頭白、不盡還家去國情（若い時より奔走を続け、今はすっかり頭が白くなったが、都を離れ家に帰る思いは尽きない）[30]」、「歸雁二首（其二）」に「作計胸懷早、爲生去住頻（胸中には早くから計画を定めているが、生活のために移住を繰り返している）[31]」とある。これらの詩からは、隠居を望みながらも、やむをえず出仕の途を選ばなければならなかった陳師道の苦衷が窺われる。

陳師道の晩年の詩を見ると、隠居への望みは更に強まっていたことが分かる。元符元年（1098）徐州で作った「答顔生見寄」には次のようにある。

闕然車馬不聞音、行路艱危已備更。問舍求田真得計、臨流據石有餘清。江山滿目開新卷、韋杜諸人得細評。閑處著身容我老、忙中見記識君情。[32]（車馬の音が途絶えた今、危険な道を歩きつくした。田舎に屋敷や畑を求めるのは本当に心に適う、流れに臨んで石に寄り添えば心は清々しい。江山が目の前に溢れんばかりに新詩の巻を繰りひろげて見せる、それらをまるで韋應物や杜甫の詩にうたわれた風景そのものであるかのように味わうことができる。この閑適の場に身を置いたまま年老いてゆくことができる、忙しいなかにあってわたしのことを思い出してくれた君の友情がありがたい。）

この詩は、顔生に答えるというよりも、自分自身のことを述べたものである。冒頭二句の「車馬」「行路」は出仕の生活を、第三句の「問舍求田」は隠居の生活を表す。陳師道は官途をめざす生活に厭き、田舎暮らしこそが最も

心に適った計画だと述べている。[33] 同様の感慨は、他に「贈大素軻律師二首（其一）」に「自笑世間千計錯、羨他湖上十年人（世間の人々のさまざまな計が誤りであるのを笑い、湖のほとりに十年の間暮らす人を羨む）[34]」と述べられる。また、元符三年（1100）の作である「宿合清口」には「卧家還就道、自計豈蒼生（家に寝転んで道を学ぶ、わが人生の計は民人のためのものではない）[35]」とあり、官吏として人民のために勤しむ暮らしを棄てて、自分一人の慎ましやかな隠居生活をめざそうとしている。陳師道は一生を貧困に苦しんだが、その苦しみの一端は本詩にも現れている。

以上、陳師道の現実生活に即した人生設計に関する表現を見てきた。しかし、その一方で、陳師道の詩には長生の願望を表すものもある。例えば元符三年の作「宿斉河」は次のように述べる。

燭暗人初寂、寒生夜向深。潜魚聚沙窟、墜鳥滑霜林。稍作他方計、初回萬里心。還家只有夢、更著曉寒侵。[36]（灯火は暗く人は寝静まり、寒気が生じて夜が深まる。水に潜む魚が沙の窟（あな）に集まり、鳥が霜の林へと舞い降りる。少しずつ他の計画を暖め、万里の道を行こうとするもくろみを撤回する。郷里へと帰るのはただ夢のなかだけ、今朝の寒気に体を侵される。）

任淵は、「他方計」については「西方の極楽国」に行くこと、「回心」については「四方の志（官吏として四方を旅する志）」がないことを言うと解釈している。この解釈に従えば、ここでの「他方計」は、先に挙げた王梵志詩の「千年調」と同じような意味合いで用いられていることになる。陳師道の詩にも、長生の願望を表す語としての「千年調」は受け継がれていたのである。

また、建中靖國元年（1101）に作った「贈石先生」にも次のようにある。

多方作計老如期、百疾交攻遽得衰。晩有勝縁逢異士、生須快意闕前知。迫人鬢頷紛紛白、臨事迴迂種種遲。分我刀圭容不死、他年鶴馭得追隨。[37]（様々な計をなしても老いは期日どおりにやって来る、多くの病に悩まされすっかり衰えてしまった。晩年になってやっと縁に恵まれ卓越の士と出会い、人生の痛快さを今更ながらに知った。追い立てられるかのように髪や髭が次々と白くなり、諸事に臨んではぐずぐずと不完全なままに取りのこされる。わたしに丹薬を授け不死の道を許していただけるならば、いつか鶴にまたがって先生に従うことができよう。）

この詩は陳師道が自分のことを述べていると解するべきだろう。『老学庵筆記』[38]によると、石先生は薬を作ることが得意で、丹薬を作るのを好む道士。つまり詩に言う「異士」である。第七句に「不死」とあることから、首句の「多方作計」というのは、様々な方法によって長生を図る意味であろう。しかし、結局は詩人の願望は実現せず、老い衰えて病悩まされるばかりなのであるが。

以上に見てきたように、陳詩の「千年調」は出仕と帰隠との間で揺れ動く陳師道の人生に即した現実的・実践的な意味合いが強いものから、長生を希求する観念的な意味合いが強いものに至るまで、幅広い思想を表す語として用いられていた。王梵志や寒山など、唐代の詩僧の詩と比べて、より広く、また複雑で深い思想を表現する語となっていたと言えよう。

四　結論

「千年調」という言葉からは、儒教・道教・仏教などの諸思想が複雑にからまる唐宋文人の死生観・人生観を窺うことができる。「千年調」は、もともとは長生の願望を込めたものであり、したがって道教的な色彩の強い思想を帯びたものであったと言えよう。ところが、仏教の立場からすると一切は空であり、長生を希求することは愚かしい目論見と言わざるを得ない。王梵志や寒山の詩が表現していたのは、まさしくそのような仏教側からの道教的思想に対する批判であった。唐宋のその後の文人たちの詩にも、そのような意味合いでの「千年調」は受け継がれてゆく。

ところが、本稿で重点を置いて取りあげた陳師道の場合、そのように理解するだけでは必ずしも十分ではない。そこには、儒教（儒家思想）的な色彩が色濃く見て取れるように思われる。周知のように、儒家思想が道教や仏教と異なる最大の特徴の一つに「入世」的な傾向、すなわち現実の社会に積極的に関わろうとする傾向が挙げられる。文人たちにとって「入世」とは、具体的には出仕の途を歩むことに他ならなかった。陳師道もその例外ではなく、官吏として出仕の途をめざした。彼は、官途も順調ではなく生計に苦しみ、隠居を求めるもかなわず、悲嘆に暮れる一生であったが、しかし終生、儒家の「入世」思想を実践すべく努めていた。かかる人生の計画を、彼は「千年調」の語を用いて表現した。その典型例が、すなわち本稿に取りあげた「一生也作千年調、兩腳猶須萬里回」、「早作千年調、中懷萬斛愁」という詩句である。ここには、あくまでも儒家の立場を守り、道教や仏教には傾こうとしなかった陳師道の思想的態度が凝縮されていると言って良いだろう。

［注］

（1）宋・陳師道撰、宋任淵注、冒廣生補箋『後山詩注補箋』巻四、中華書局1995年、145頁。以下『補箋』と略称。
（2）宋・釋惠洪『林間錄』巻下に「予嘗愛王梵志詩云『梵志翻著襪、人皆道是錯。寧可刺你眼、不可隱我腳』、寒山子詩云『人是黑頭蟲、剛作千年調。鑄鐵作門限、鬼見拍手笑』、道人自观行处、又观世间、当如是游戏耳」。
（3）唐・范摅『雲溪友議』巻下「蜀僧喻」に「（梵志）詩云『世無百年人、擬作千年調。打鐵作門限、鬼見拍手笑』」。宋・費袞『梁溪漫志』巻一〇「梵志詩」に「世無百年人、強作千年調。打鐵作門限、鬼見拍手笑」。
（4）宋・曾慥『類說』巻四一「王梵志詩」に「世無百年人、擬作千年調。打鐵作門限、鬼見拍手笑」。
（5）任半塘編著『敦煌歌辞総編』、上海古籍主版社1987年、1566頁。
（6）宋・司馬光『資治通鑑』巻一四四。
（7）『大戴礼記』巻一三「易本命」に「有羽之蟲三百六十、而鳳凰為之長、有毛之蟲三百六十、而麒麟為之長、有甲之蟲三百六十、而神龜為之長、有鱗之蟲三百六十、而蛟龍為之長、倮之蟲三百六十、而聖人為之長」（台灣商務印書館、四部叢刊本）。『論衡』別通篇に「倮蟲三百、人為之長」、自紀篇に「人亦蟲物、生死一時」、仲長統「覈性賦」に「倮蟲三百、人為最劣」。
（8）『全唐詩』巻八〇六、中華書局1960年、9082頁。
（9）『全唐詩』巻六八六、中華書局1960年、7882頁。
（10）『全唐詩』巻五三三、中華書局1960年、6084頁。
（11）『全唐詩』巻八、中華書局1960年、75頁。
（12）傅璇琮、倪其心等主編『全宋詩』巻一二九九、第22冊、14741頁。
（13）『全宋詩』巻一八四四、第32冊、20536頁。
（14）宋・范成大「胭脂井三首」其二（『石湖居士詩集』巻二、台灣商務印書館、四部叢刊本）。
（15）同上、巻二八。
（16）唐・李延壽『南史』巻一七、中華書局1975年、第2冊、482頁。

(17) それぞれの引用は項楚校注『王梵志詩校注』王梵志詩〇一二、〇三五、二四四、二八〇、二八四、上海古籍出版社 1991 年。
(18) 胡適『唐初的白話詩』、張錫厚『王梵志詩研究彙錄』から引き、上海古籍出版社 1990 年。
(19) 「相思会」に「人無百年人、剛作千年調。待把門關鐵鑄、鬼見失笑。多愁早老、惹盡閒煩惱。我惺也、枉較。塵衣淡飯、贏取暖和飽。住個宅兒。只要不大不小。常教潔淨、不種閒花草。據見在、樂平生。便是神仙了」(『欽定詞譜』巻一七、中國書店 1983 年、217 頁)。
(20) 宋・莊綽『雞肋篇』巻下。また、『宋詩記事』巻一〇〇に北宋の俚語として「人作千年調、鬼見拍手笑」。
(21) 宋・梅堯臣『宛陵先生集』巻二二、台灣商務印書館、四部叢刊本。
(22) 唐・鄭棨『開天傳信記』に「萬回師、閿鄉人也。……兄被戍役安西、音問隔絶。父母謂其誠死、日夕涕泣而憂思也。……忽一日朝賫所備、夕返其家、告父母曰『兄平善矣』。發書視之、乃兄迹也、一家異之。弘農抵安西萬餘里、以其萬里而回、故謂之萬回也」。
(23) 『補箋』巻一〇、375-376 頁。
(24) 『晉書』巻九四、「陶潛伝」に「吾不能爲五斗米折腰、拳拳事鄉里小人耶」。
(25) 『後漢書』巻三九、「毛義伝」に「毛義少節家貧、以孝行稱。南陽人張奉慕其名、往候之、坐定而府檄適至、以義守令、義奉檄而入、喜動顔色。奉者、志尚士也、心賤之、自恨来、固辭而去。及義母死、去官行服。數辟公府、為縣令、進退必以禮。後舉賢良、公車徵、遂不至。張奉歎曰『賢者固不可測、往日之喜、乃為親屈也。斯蓋所謂「家貧親老、不擇官而仕」者也』」。
(26) 「答張文潛書」に「僕家以仕爲業、舍仕則技窮矣。故僕之於仕、如瘖者之溺聲、氣不動而於足亂矣」(『後山居士文集』巻一〇、上海古籍出版社 1984 年、影印宋刻本)。
(27) 『補箋』巻二、77-78 頁。
(28) 『補箋』巻二、87 頁。
(29) 『補箋』巻四、172 頁。
(30) 『補箋』巻四、172-173 頁。
(31) 『補箋』巻一〇、359-360 頁。

(32)『補箋』巻七、268-269 頁。

(33) 晉・陳寿『三国志』巻七、「陳登伝」に「君有國士之名、今天下大亂、帝主失所、望君憂國忘家、有救世之意、而君求田問舍、言無可采、是元龍所諱也、何緣當與君語」。

(34)『補箋』の「後山逸詩箋」巻下、569 頁。

(35)『補箋』巻一一、410 頁。

(36)『補箋』巻一一、418-419 頁。

(37)『補箋』巻一二、452-453 頁。

(38) 宋・陸游『老学庵筆記』巻三に「石藏用名用之、高醫也。嘗言今人稟賦怯薄、故案古方用藥、多不能愈病、非獨人也、金石草木之藥、亦皆比古方力弱、非倍用不能取效。故藏用以喜用熱藥得謗、群醫至為謠曰『藏用擔頭三斗火』。人或畏之、惟晁以道大喜其說、每見親友蓄丹、無多寡、盡取食之、或不待告主人。主人驚駭、急告以不宜多服。以道大笑不顧、然亦不為害。此蓋稟賦之偏、他人不可效也。晚乃以盛冬伏石上書丹、為石冷所逼、得陰毒傷寒而死」。

（大学院博士後期課程学生）

摘要

“千年調”考論
——以陳師道為中心

趙 蕊蕊

“千年調”長期活躍於文學領域，至北宋形成俚語。此語產生之初，帶有濃厚的佛教及道教色彩。至北宋，梅堯臣及陳師道將其引入詩歌，體現了“以俗為雅”，“以故為新”的詩學理論。本文通過考證“千年調”之流播狀況，重點分析此語於陳師道詩中產生的実践意義，並由此探討唐宋人的生死觀及人生觀，及士人階層如何以儒家思想改造佛教及道教的生命觀。